

静岡県藤枝市岡部町松岡神社史料について (三)

岩下 哲典

〔前承〕前号では、松岡神社史料目録番号99「異国船横濱到来ニ付、水戸様・毛利様御立腹ニ付、諸狼人出来始末」を全文翻刻した。

本号では、それに関連する史料、目録番号115「異船渡来」全四冊のうち第一冊目115-1の翻刻文を掲載した。解題は、四冊目が終わった段階で付すこととする。

本号で翻刻した部分では、江戸時代後期の代表的蘭学者・洋学者として著名な箕作阮甫の名前が散見される。すなわち、弘化元年(一八四四)のオランダ国王ウイレム二世の開国勧告親書奉呈一件(オランダ軍艦バレンバン号事件)の情報や翌年のイギリス軍艦サマラング号の長崎入港一件などの対外情報に阮甫が関与し、その情報漏洩にもかかわっていたのではないかと推測される。当時、阮甫は、美作津山藩医の傍ら、幕府天文方蕃書和解御用の役職にあり、上記対外情報に容易にアクセスしえた。というより役目として扱っていた。阮甫はその後、嘉永七年(一八五四)のロシア使節プチャーチンとの長崎における交渉などにも翻訳御用を勤め、安政四年(一八五七)の蕃書調所設立にあたっては上席の教授となった。また文久元年(一八六一)には幕臣に取り立てられた。阮甫は情報漏洩には十分注意したと思われるが、本史料では、阮甫から情報を入手したことが明記され、興味深い事例と思われる。詳しくはいずれ解題等において考察したい。

なお、□は虫損等により判読が不明な文字である。傍注は岩下によるものである。朱書きは（ ）で注記した。見せ
 けちはそれとわかるように表記した。

また、釈文作成に当たっては、高橋泥舟史料研究会のイアン・アーシー、毛塚万里、服部英昭、本林義範、小林哲也、
 関廣好、岸本萌里、金澤朋香各氏の協力を得た。記してお礼申し上げます。

史料翻刻

松岡神社史料 115-1 「異船渡来」

(朱文方印)

松岡蔵書

1才

弘化元甲辰年八月

和蘭陀使節一件書付

2才

箕作阮甫左之通申聞、別紙差出之

此節長崎沖江異船相見候由二而種々世評有之候得

共、虚説而已二而難取用、別紙者肥前唐津藩中之

ものゝ貫受候、長崎奉行伊沢美作守殿の九州御持場

有之候御方々江御觸達ニ相成候由

一、松平肥前守殿御持中、例七月長崎表へ御出役有之処
右御觸達ニ付、六月中御出役被成候由、御人数壹万人

一、松平美濃守殿ニ而者肥前守殿御出役も有之程之儀
異変可有之も難計由ニ而御人数被差出候由、三千人

一、松平大膳大夫様ニ而も御手配有之御領内之船不殘他
方へ乗出候を被差止、御用意被成候由

一、和蘭国の軍船差越候儀、是迄忝度も無之、此度者
全く書翰大切故、途中ニ而取られ候様之事有之候而者

2ウ（22ウは全て朱文）

不相成、守護之為、軍船ニ乗、使者差越候事ニ可有之ト
申趣、乍併何礼ものを為乗来り候哉難計、長崎奉行

の御觸達ニ相成、御固メ有之由

一、和蘭国王之書翰者何を認メ有之哉相知レ不申候得
共、エケレス人の無余儀被相頼候付申上候事ニも可有

之哉トの評も有之由

一、軍船ハレンバンタ鉄砲何百挺、ホレアス同断定メ有之

事之由

右之通申聞

七月十三日

3才

和蘭八月上旬皇國六月十八日ヨリ
七月二日比迄ニ當ル和蘭國王之フレカツト軍船ノ名

ハレンバンク船号又者コルベツト軍船ノ名ホレアス船号又其他國王

所持之船之内、態々當節和蘭國王ヨリ御國ケイスル帝ト
訳ス

是ハ彼國ヨリ
公方様ヲ申上ルニ奉捧書翰ヲ差越船ニ御坐候、此書翰ヲ差越候儀ハ

御政道御為ニも可相成儀ニ而敢而彼國ノ利益ニ拘り候儀ニ

無之、日本御大切之事共申上候儀御座候、右書翰者阿蘭陀商

買筋等ニ拘り候儀、聊無之哉と奉存候

カヒタン

前書之趣、和解差出候間、兼而被仰渡候持場等見廻居候様

可有之候、以上

3ウ

六月十七日

伊沢美作守

4才

此度當湊江渡来之船ハ其國王ノ日本國江捧書簡

候使節之趣ニ付、並通商トハ譯違間、取扱方別段ニ致

可申なれ共、着船礼義其外之趣意を以、船二而石火矢

打候節、同数ニ合炮致スハ異國之法ニ而外國ニ而ハ同様

打合由なれ共、於日本ハ右様ニ無之、合炮致ス義ハ國法ニ

あらず、又礼義共せず、依之何ケ度申立といへ共、右法ニ背

取斗致兼、國の王命を不受してハ難免、其國とハ数年

之信義、他國ニ頃類（比）なき事ニ有之、此地之海江乗込上

ハ當地之法式可相守ハ當然之道理ニハ無之哉、能々右之

趣意熟考ニおゐてハ敢て難渋申立へき取斗ハ無之

4ウ

義ト存候間、此段會得行届様ニ使節江申遣様いたす

へし、若心得違を以非義不法いたすニおゐてハ難捨置

不得止事使船之無用捨嚴重ニ可及沙汰もの也

辰六月

御奉行所カヒタン江被仰渡之書付

一、此度阿蘭陀國今日本國王江之使節、其外乗組壹船當

湊江入津いたす由、咬啣（咬）吧頭役今荒増申趣候趣、御役所

江申上、阿蘭陀國法之通日本ニ而も合炮有之様致度旨

を以、五ヶ条之願書差出候ニ付、逐一一致一覽候處、探
5才

改、帶劔人別改、端船之廉ハ別紙之趣を以、承り届湊内
江入津いたす節ハ滯船中譬、如何様之船ニ有之共、日

本國法ニ依而、玉葉ハ預り取上置、武器之類ハ檢使見分

之上、差圖いたす間、其意に可相任、尤品々ハ掃帆之節、不

残相渡遣シ、本船ニ而石火矢打候義ハ其國之法ニ有之共

日本ニ而者台圖之外、合炮ハ不致方、國法ニ而則礼義ニも

無之間、右之趣相心得、別紙之趣をも横文字ニ取直し、高

銚邊差船^書之頃、見斗、彼船江差遣可申事

辰六月

5ウ

別紙

第一 身元探改之事

是ハ用捨いたす積

第二 帶劔之事

是ハ差免積

第三 人別改之事

是ハ人別ニ不致、改乗組人数書可差出事

但シ玉薬武器之廉、本紙ニ認置

第四

本船ハ端船を以、出嶋江往返之事

是ハ勝手ニハ不相成、用船差出置候間、用候事之節

ハ檢使江申出、可受指圖事

第五

石火矢合炮之事

是ハ本紙ニ認置

6才

風説書

一、去年御當地ハ帰帆仕候船、日本地方之内ニ而大風に逢ひ

本船大ニ動揺仕、アカノ途カ浪入漏り強ク候間、唐國之内、ホンコン地名

地方江入れ、修復相加申候、右之仕合ニ而漸去十二月廿一日

咬啗吧着船仕候

一、當年来朝之阿蘭陀船一艘五月十五日咬啗吧上船仕、海

上無別条、今日御當地江着岸仕候、於洋中外國并

唐國船見掛不申候

一、エケレス國女王為見舞、フランス國并ヘルギー國王

方江参り申候

一、イスハニヤ國中之一揆靜謐ニ相成申候、イサヘルテ与
申王女子、女王ニ即位仕候

一、フランス國分唐國へ使節差越、軍船数艘引連候
儀ニ御坐候

一、唐國エケレス國之一件、是迄追々申上候、末々模様ハ別
段相認め差上申候、

かひたん
ひいとるあるへると

ひつき

右之通、船頭并ハツクホリスメーストルへとる阿蘭陀人
申口、かひたん承り申上候間、和解差上申候、以上

目付
年番
通詞

此度渡来之阿蘭陀船咬啗吧頭役分かひたん江差越候書

簡之内、阿蘭陀國王分御政道筋御為ニも相成候義可申上旨

ヲ以て、彼方本國分商賣船ニ無之、態々船相仕立可差越

段、かひたん申上候、尤右船長崎湊へ着岸之頃者六月十八日

頃分七月二日頃迄二者着岸可致二付、備向嚴重取斗

且領内浦々入念候様、昨十七日伊澤美作守分彼地差置候家来之ものへ相達候段申越候、依之備向等猶又嚴重

ニ申付候、且又阿蘭陀船入津旁ニ付、私義明後廿日分彼

地江罷越候義ニ御坐候、此段御届申上候、以上

六月十八日 松平肥前守

7ウ

右之趣、七月五日御用番牧野備前守殿へ御届差出申候

於長崎阿蘭陀本國仕出し之船壹艘、昨二日未之下刻

就入津高銚嶋邊江為致滯船、外々疑敷義も無之旨、伊

澤美作守分彼地江差置候家来之者江書付を以て相達

し候通、申越之承知仕候、最前も委細申上候通例之商売船

と相違ニ付、諸事為手配家老諫早豊ッ前者先達而長崎

江差遣し、猶又為手配親族鍋嶋伊豆、早速差遣し申候

陳者私義も明四日、彼地罷越候義ニ御坐候、此段御届仕候、以上

七月三日 松平肥前守

8才

右之御届書全月十七日着、同十八日御指出し

大村侯・嶋原侯之御届も右に准ス故ニ略ス

長崎奉行伊沢美作守、手頭を以て町々へ被仰渡候写シ

阿蘭陀船徒本國仕出し船隻艘、近々當湊江入津致候由

咬啗吧頭役より在留かひたんへ此度申越候趣有之、右船者

全く商売船ニハ無之哉ニ候得共、事柄も相分り聊以仔細無之

事ニ付、安心之上、平常之通、無危踏商売致、猥ニ浮説申

觸問敷候

六月十八日

8ウ

此度長崎表江阿蘭陀國より別船渡来之由、伊澤美

作守之相達申候ニ付、六月廿一日、一ノ手操出申候間、人数左之通

一、東陳^陸 大音彦左衛門 一、大組頭 永嶋重左衛門

一、大頭 大音権左衛門 一、大組 池田源左衛門

一、同 大野十左衛門 一、馬廻り頭 野村権左衛門^{本作勘}

一、目付 老 人 一、足軽頭 八人^{姓名有之}

一、石火矢役 拾六人 一、大筒役 二十六人

一、無足 三十六人 一、医師 四人

一、船頭 五人 一、足軽 二百四十人

一、水主 千八百人 一、船蔵付 二人

9才

一、浦付方 四人 一、小使 式人

一、船数 百四十四船一本七 一、鉄炮方 九人一本十三

一、米方 二人 一、船大工 八人一本拾

惣人数二千六百式十式人

七月十八日 松平美濃守

11才

辰七月二日

注進有之候上、波戸場分建行丸一同致出船、高鉾邊後江船

繋り候處、小瀬戸分十七、八り參候由、尤書簡取者注進、早速

沖手へ乗出し申候、私共沖手出張、直ニ名村貞五郎・野生三人

御役所附尾上籐之助・中尾若次、鯨船分質人卸として乗出し

伊王嶋前ニ而海陸廻り、鯨船江乗移、野口善太夫一同伊王分

一里斗乗出し候處、向より真追手ニ而白帆船一艘參

候處、直様乗付候得共、何分荒波ニて乗付かたく、既ニ危く候

之處、本船分綱一筋投卸し候ニ付、取付、漸く乗付、質人と

して武官のもの式人役所諸書付持卸したるを出しま

へ連越、又々直様沖手へ引返し申候、尤質人卸の節、軍
 船及一見候處、上段艦の方ニ石火矢七挺、下段表分艦まで
 式十挺、ノ式十七挺、両側にて四拾挺備居申候、尤其節重
 役のもの互相見へ両脇ニ金にて房飾り有之帶釵^④之者五
 六人見掛け申候

一、出嶋分引返し候處、本船ハ最早高鋒前ニ碇入居候間

直様乗船仕、先階子を登り候處、階子上船の入口ニ帶

釵^④武官のもの一人早薬^④入胸乱腰ニ付け、釵^④付鉄鉈

ニ薬仕込、すわと言ハ、打放すへき様子にて構へ居申候

尤右者田上にてベレトシ有之節之装束ニ少しも変不

申候、併鉄鉈^④ハ少しも誘^④無之、誠ニ磨上申候、跡にて承り候處

此者ハ終日終夜右之通にて一時交代のよしニ御坐候、猶又

鉄鉈^④者船大将折々見分いたし、白き着物ニ而掛衣見

若少しニ而も誘^④等有之、大將着物穢れ候得ハ、其ものハ

直様押込退勤為致候由ニ候

一、夫分内ニ入、左手艦の方ニ参り候處、右火矢備有、一見^④

候處、長さ凡壹間半斗二而、太さ凡式人廻り位二候、尤

玉目は三貫目位二候、入口之向ニ九人持階子の上、同様

釵付鉄鉋所持いたし、右其上手ニ、太鼓式丁有之、其脇

成る樂の者九人喇叭所持いたし候人船ニ上り候へハ、鉄鉋

12ウ

へ連(礼カ)太鼓を放、喇叭を吹立申候、誠ニケ様虫損ハ始ニて

船様厳重有之候間、左ニ驚き申候、何分形容筆紙ニ尽

しかね申候

一、乗組人数三百五十人餘、尤別ニ黒坊七、八人

一、此船本國より咬啣吧ニ廻り、九日滞船、直ニ出船、昨日二日

まで二十五日経り入津、石火矢ハ四十四挺備の由ニ候得共、餘

り荷足重く相成候間、此節三拾六挺備のよしニて乗

渡し候由、艫表ニ石火矢窓式ツツ、有之、櫓もよほど高

く、此間入津致し候船とくらへ候へハ、唐船と阿蘭陀船の

様ニ御坐候

13オ

一、夫々一段下ニ下り、見候處、艫の方ニ二部屋有之候、右之船大

将・副将之部屋ニ御坐候、其次間ハ侍頭之者集る所与相見へ

卓子等有之、皆々椅子ニ掛り居申候、此間ハ凡隔ニ侍装束を付、手ニ釵を持、侍一間置ニ凡二十人斗傍々(旁々)兩側

ニ並居申候、右卓子分少々艫の方へ当り大成ル柱様のもの

凡金壹尺斗の短筒、凡八百丁着し有之候、其前ニ斧

凡百、拔身釵ニ並ニ凡三百振斗も水車のよふニ有之

図の如くさし有候、此間ニ上段同様石火矢ニ釵付鉄鉋(鉋)

凡六、七千挺もさし有之候、此所分表の方ニ参り候處、大

成金旧(白)ニてコーヒー豆を搗居申候、是□(虫損)多勢故、小

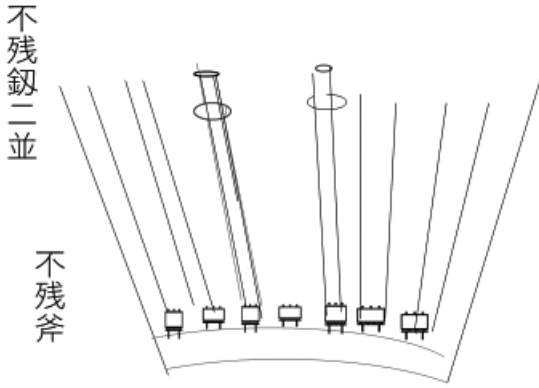
13ウ

きコーヒー白ニてハとても間ニ合兼候間、**虫損**ニ致し

候与相見へ申候、其側ニハ白ニて紛(粉)ニいたし居申候、又々表

の方ニ進有之、尤碇綱入候處之今一段下之處ニ御坐候

此所の綱ハ入れ候碇の綱ニ候



一、夫分三段目ニ参候處、此處分不残侍部屋ニて鱧一番部屋二者石火矢玉有之、式番目ハ帆部屋、三段目倅并綱部屋、四番五番六番七番目者不残侍の間ニて両側ニ一人ツ、部屋取有之、凡三十部屋斗有之候、八番目ハ鶏豕部屋ニて、鶏六、七千羽、豕五、六拾疋有之、其次ニ九番目ハ酒屋部屋ニて三石桶位のきつびたふす有之、ぜ子フルアラキ其外酒類四桶有之、茶盆壺ツ宛添有之、四番目ニ参候處、其処ハ兵糧と相見へ表与鱧ニ塩硝部屋有之、其処羊角燈籠壺ツ火燈し有之、塩硝部屋前より左右ニ凡幅式間餘之鉛延板（虫掛）□有之、其上

14ウ

ニ水盛有之候、

右之外、誠ニ抑天仕候事而已難盡（仰天カ）

一、三段目ニ而不絶塩硝搗居申候

一、船、長さ三拾八間八合、幅七間

一、大将壺人、副将壺人、第一等侍、是ハ両肩ニ金飾房有之、拾人、第二等四人、其外式、三拾人

一、軍令石火矢打方之下知、都而^(銀方)□軸ニ御坐候

一、昨日乗船用向相仕舞、船々卸度旨申聞候處、暫く相
待居呉候様申聞候得共、御檢使其外皆々卸仕舞候間

通辞而已残居候而ハ不宜候旨申聞候、是非卸度旨申聞候

15才

處、左様可有之候得共、國法ニ而殊ニ軍令ニも有之候間、手

数相濟候迄、暫く相待居呉候様との義ニ付、相扣居候処、二段目

より石火矢打放し申候、此節ハ上段ニ居、よほと表のかたにて

打方いたし候得共、誠ニ筒音烈しく、私共ハ筒音にて飛上り

位ニ有之候、真足下にて被打投候てハ、迎も難堪可有之与相考

申候、扱、右打方相濟候上、九人の者下知ニ従ひ、ペレトシ^(ベ)之^(シ)手前

を致し、其上九人の者喇叭を吹立、壺番ニ進ミ式番ニ太鼓

二丁打方相進ミ、三番目ニ釵付鉄鉋^(鉋)の者九人、四番目ニ

金房さしのもの十人、其次ニ侍四人、又其次ニ式十人終ニ

釵拔持居候者八人、皆々一同ニ^(縦列)中立繼烈を正し

15ウ

船中廻り本の所ニ参り、私共を相送り申候處、嚴重に

して号令の正しき事、誠ニ目を驚し一統感心仕候

一、侍之内耆人五拾歳ニ相成候由、誠ニ此上美男ニテ漸十
七、八歳ニ相見え申候、此者ハ追々昇進いたし、高官ニ相成申
候由ニ御坐候

一、階子上船入口側ニ居候兵士、上段ニ釵付備居候兵士并二段
目ニ釵持備居候兵士、昼夜共右様ニいたし候由、尤一時宛ニ
交代致候由ニ御坐候

一、昨日手数相濟候上、かひたん本船江參り、用向相濟候上
船大将一同出しまニ參り申候

16才

一、七ツ時頃出嶋今昨日質人ニ相成候兩人之侍、本船江參り、加

福喜十郎乘込居候處、右兩人之者共出嶋江も最早參り

不申趣申出候由、健行丸掛合罷越候間、中津市兵衛殿・渡部重

三郎殿、私共皆々本船へ乗付候趣意承札候處、兩人并副將

申聞候ハ當節日本之ため御忠節ニ罷越候處、何歟御

疑之御様子ニて小船等澤山相免え、本船脇ニ五、六艘之橋船

是ハ加役方之船繋り居候本船を困居候様子相免え、先達而

御願申上候合炮之義も無御免、尤此儀ハ昨日被仰聞候通

御國法無之候ハ、何は強之御願申上候譯も無之候間、昨

日承知仕候、然ル處、永々湊入も無之、此所ニ而ハ、風波之
16ウ

愁ひ難斗候間、早々御挽入可被下候、若哉私共乗渡

候義、御好間敷からず被思召候ハ、明朝ニ而も出帆可仕候
得共、御國之御為をも存し、遠海乗渡(ワカ)し御為不

相勤候而ハ折角乗渡候詮も無之、是江相待候得共

玉葉其外武器・塩硝卸し不申候而ハ湊入難相

叶由、雖然此義ハ軍令ニも相觸候義ニ付、幾度被仰聞候

共、決而おろし不申、何歟与思召候とも既ニ阿蘭陀与

日本ハ二百年來通信仕候得ハ、たとへフランスニ而もエケ

レスニても亦ハ其外知音之船、乗渡候とも私共ハ御國之

御加勢申上候義ハ、當然之理共ニ有之間敷哉、其節

17オ

塩硝玉葉・武器無之候而ハ何を以御加勢申上相防候哉

只あんかんと詠居候外無之、如何して左様之義出来

可申哉、如何程ニも御加勢申上候心底ニ御坐候、是等之

處御分り無之ハ、於私共誠ニ残念ニ奉存候、胸をさき入

御覽度、扱々残念之至ニ御坐候、夫迎も御聞入無之候ハ、

最早此上ハ致方も無之、たとへ大将ハ出嶋江残し

置候とても不苦、明朝ニも出帆可仕間、人質兩人御返し

不申上段申出ル、何分相渡し不申候を誠ニ漸く相説、右

代り二人受取、出しまへ差越、右入津翌朝加福喜十郎

質人江差添、本船へ出役致候節之手續承り、夫を書

17ウ

留致候を又写し候也

19オ

琉球国之内八重山嶋江
異国船漂來之儀ニ付届

松平大隅守

私領琉球國之内、八重山嶋江去年十月十日異國船壹

艘漂來、役々差越相尋候處、異國人者言語・文字不通候

得共、唐人乗組居嘆咭喇國之船ニ而人数式百六拾人乗

組到着致し候段申出、左候而橋船より濱邊江上陸、布屋

取拵、兩三人ツ、罷在、遠眼鏡を以山野海邊等測量、近邊

離嶋迄も致測量候付、右様上陸者勿論致測量等儀ハ不

相成、国法之趣を以、只管相断候得共、一圓不致承引、右ニ付

而ハ嶋役々共別而當惑致、難洪候得共、此上強而差留候

而者不意之仕形も可致出来躰、端嶋之小嶋無是非、夫形堅

19ウ

固番人等附置候處、同十一月廿九日致出帆、且又同十二月朔

日宮古嶋江も異國船壹艘漂來、是又致測量ニ付

前條同断差留候得共、不致承引、同十六日致出帆候段

琉球今届來候ニ付、委曲長崎奉行江申達候由、国元家

來共申越候、此段御届申達候、以上

八月十六日

琉球国之内、那霸沖江異国

船漂來之儀ニ付届

私領琉球國之内、那霸沖江當三月十一日異国船壹艘

漂來卸碇候ニ付、漂來之次第相尋候處、異国人者言

語・文字不通候得共、唐人壹人乘組居、佛朗西国之船

20才

人数式百三十人乘ニ而廣東江罷渡、帰帆之折、洋中

逢難風、船具相損、右修補并糧食為求方致來着候

段申出、尤本船江石火矢・鉄鉋(砲)・鎗・刀等段々乗セ付有之候得

共、兵船之様子ニ而者無之候、且又船具修補用之木并糧

食用牛・豚・野菜等相求度申出候付、相与候處、船具修補

者異國人共自分相調候、左候而右船乘頭より佛朗西國之儀式百年來、中国致通融、近來尚相親ミ、依之佛朗西^西皇帝之命を受、中国隣近之諸国可致交通候間、琉球江も其通問合致交易度旨申出候付、琉球国之儀、全躰産物相少、勿論金銀銅鉄類者全く無之國柄ニ候得者、
20ウ

も交易者不相調段、分而申断候處、一圓承知不致、此

儀不相成候ハ、和を通し好を可結申聞候ニ付、是又相断候

得共、落着無之、猶追々彼國大総兵船可致來着ニ付

交易向等速ニ吟味難相遂候者、右大総兵船來着之上

何分返答可致、且又船者通事乗合無之候付、異國^右

人忝人・唐人忝人残置、本船者可致出帆旨申出候間、其節

も同様何分交易者不相調諷合、且琉球者請國之屏^請

藩ニ而彼国并度哇^(吐噶喇)咄致通融、勝手次第外

國江交易者不相叶、勿論異國人留置候儀も不相成趣

再往無餘儀相断置候處、同十九日本船者可致出帆旨申

21才

出候、然ル處、同日酉刻時分橋船壹艘漕來、異國人

老人・唐人老人濱江卸置、橋船者疾漕帰り候付、唐人

江子細相尋候處、大総兵船來着之節、為通事残居

候様乗頭より申付候段申出候二付、前以も達置候通、迎も

留置候儀者不相調段申聞、早速如本船漕送らせ候へ

とも、其内夜入、本船も不相見、漕帰り候付、無是非近邊

寺申明除召置、柵を結、番所等数軒相構、夜日勤番

申付、三司官初、相詰堅取締申付置候、然ル處、同廿八日通

事唐人を以啖咭喇國多年琉球を望ミ、心深く追

々兵船差渡二而可有之、佛朗西國与致和好、得保護

21ウ

候者おのつから暎國より被奪候難も無之と申聞、其上

天主教を強而傳授可致と申者趣も申聞候得共、琉球者

中國之教化を受、孔孟之道を学ひ候付、天主教と申

者難成と之趣二而相断置、夫迎取扱致疎意置候而者憤

を挟ミ、大総兵船來着之節、尚又難洪可申掛勢

故、折角丁寧を尽し、無異儀令帰帆候様取斗可

仕候、右付而者異国人・唐人共夫々被仰渡置候通、致取

斗度事候得共、琉球之儀遠海相隔候端鳴二候得者

万一大総兵船來着、右之次第露頭之時者端嶋之

儀、難手及者顯然二付、先者平穩之致取斗置候趣共

22才

委曲飛船取仕立、琉球分申越候、就而者此末、大総兵

船來着、何程難洪申掛候而も何分二も及理解、無

異儀為致帰帆候様可取斗事二ハ候得共、自然及乱妨

候而者端嶋之儀、以之外之事候付、平日差渡置候家

來共も有之候得共、尚兼而非常之手当申付置候、一組之

人数早速琉球江差渡候段、長崎奉行江委曲申

達候由、国元家來共申越候、此段御届申達候、以上

八月十六日

22ウ(22ウは全て朱文)

一、書翰差出候節、和蘭陀屋敷分立山役所へ迎之行列之由

一、書翰八月廿二日出立、御日付持參、九月廿一日頃江戸着之由

一、蘭人ハ江戸表へ忝人も不參候由

一、書翰上箱飾之延金其内天鷲絨袋二入、其内又箱二入有之、開封

不相成由

横文二而認有之共和文共申由

右評判二有之旨箕作阮甫申由之事

23才

八月廿日四半時頃 行列附

羽織袴着用
町使

羽織袴着用
町使

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

塗傘 紺羽織立付着用

肥前足輕

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

紅白青旗
國王旗
老人

肥前足輕

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

23ウ

音楽之者

太鼓

帯鏡

喇叭

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

書翰持

介添

太鼓

帯鏡

喇叭

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

音楽之者

太鼓

帯鏡

喇叭

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

通詞

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

金兩肩房帯鏡
カヒタン

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同
将官 黒坊

同
将官之
駕籠

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同
士官之者

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同
士官之者

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同
通詞

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

24才

部屋附

部屋附

塗笠縮羽織立付

肥前足輕

肥前足輕

24ウ

馬口取

侍フツキ半天

馬口取

合羽駕籠

合羽駕籠

25才

侍差添之

此所凡半丁程隔

同心衆

26才

私領琉球國之内、那覇沖江當八月廿三日異国船大中小三艘渡来

部屋附

部屋附

駕籠カヒクワン

同

同

同

侍

騎馬漆笠野袴丸羽織

侍

侍

箱

御役所附

御役所附

御役所附

御役所附

御役所附

長柄

挟箱

合羽

同

同

同

長柄

馬飼駕籠

草り取床几持

御役所附

御役所附

御役所附

御役所附

御役所附

御役所附

御役所附

卸碇候付、役々差越相尋候処、言語・文字不相通、唐人耆人乗組居、啖咭喇國之船二而大船・中船二艘共式百四拾人充、小船百三拾人乗、清國寧波府出帆來着之由、右船乗頭皇命を受差越候間、國王江對面致度申出、直對不相成國法之旨相斷候得共、不致許容種々難題申立候付、乍漸國王病氣之趣を以、布政管致面會旨相達候処其通聞濟、翌廿四日布政官之名目二而座喜味親方役々召列、右船江差越候処、外二艘乗頭も列席、國王安否尋、且近年啖船漂着、又者渡來之節、会釈等丁寧之為謝答、來着致候間、宜預洩達旨承り候付、翌日國王承知之挨拶、右座喜味を以厚申述

26ウ

置、右候而当四月以來其國醫師・妻子并唐人長々滯留二付而者萬端費用不少、且諸用弁役々其外昼夜相詰、小国甚及迷惑候付、此節

列婦候様、強而申達候得共、種々申凌、一圓不致頓着候、同日右醫師啖

船へ差越度申出、任其意、役々差添致面會請^{請立}帰り候所、啖人七人醫師

一同上陸差留候得共、不聽入、地方測量絵圖等相調、其上馬上等二而致橫行

強而差留候ハ、及騒動候勢ひ故、役々附添程能致警衛候、然処同廿六日

小船者出帆、申西之方江乘行、外二艘者同廿八日出帆、同方へ乘行候、滯

船中警衛嚴重申付、任望食料等相互へ申候、逗留之佛人も啖船へ差越度

申出候得共、無程出帆ニ付、其儀^{不相整}候、尤右之醫師・妻子・唐人并佛人兩人共于今致逗留居候段、從琉球以飛船届来候旨、委細長崎奉行へ申達候由同氏修理太夫

27才

申越候、此段及御届候、以上

十二月十一日

松平大隅守

28才

此度、和蘭国王より奉呈仕候書簡、去月廿日長崎奉行御請取^{申附}□
成、直様同所出立、当月廿一日此表到着、一昨廿三日頃

公儀江差上、直様洪川六藏殿外國御用懸りニ付、忌服御免於

西丸、右書簡翻譯ニ取懸り被居候事ニ御坐候、同人御話しニ右書簡之

大意ハ歐邏巴洲中十二ヶ国會議いたし、佛蘭西其盟主となり

和蘭も其中ニ加り、申談候二者是迄世界中鎖国にて交易致し不申

国々も此度ハ不残交易差支無之様為致度、若愈不承知之国々ハ

以軍威服従せしめ、交易取結ひ候様取斗可申、然処

我國者和蘭之外、餘國之人一切制禁、通商相許し不申候間、右交易差

支無之様為致度、不承知ニ候得ハ、軍威を加へ候て、服従致させ通商勝

28ウ

手次第出来候様取斗可申由、相談いたし候処、和蘭国之儀ハ二百年

来 本朝へ交易罷越、格別之御恩顧を蒙り罷在候事故、一應右

之容子不申上候てハ、兼々外国御目付之役儀被仰付、年々諸國之風説

申上来り候詮も無之、失信義候筋ニ相当り、無申訳義ニ付、此度右始末

以態船申上候由ニ御坐候、尤右長崎到着之態船ハ来十月六日頃出帆

いたし候由承り候得者御返書相待不申、申上切ニ而出立いたし候哉

奉存候、右之始末ニ御坐候得者、于誠不容易義ニ奉存候間、渋川氏話

之大意相認、極御内密奉申上候、以上

九月廿五日

箕作元甫

(朱文こから)
右書面差出、追々被仰上も可有之候得共、御心組御用意も可有御坐候、此節

諸家様御困米被成候

御様子 九劬ハ勿論之儀、大坂・江戸共米穀不自由、高價ニ相成可申、東西之御困米

(御時)
□御時

節と奉存候旨申出し候、尤書簡之趣ハ□□ニ而他へ不洩様申聞候様申出候
(朱文こまで)

29才

決て叛きハ不仕候得共、近来西洋一般和融相調、何事も歐邏巴諸洲

申合候約定之由、イキリス別而猛烈ニ付、無拠周旋可仕次第も可有之、今般之

企ハ全クイキリス・佛朗と兩國之企ト相聞申候、未だ国王書簡ハ相弁へ

不申候得共、定而イキリス・佛朗之交易を開可申旨、和蘭媒酌与被
存候、如何御坐候哉、公御承知候ハ、早々急使ニ而被仰知可被下候

和蘭国王書簡大意相察候処、左之通ニ可有之哉

和蘭陀・イキリス・フランス・ラロシア・オーステンレイキ・プロイス
イスパニア・イタリア・トロコ・ナーベルス・ポルチュガル・ドイツ
右拾二ヶ國一致いたし互ニ通信仕候而静謐ニ相成候事

和蘭先国王之妻ハプロイス國王之妹ニ而當時之王其子ニ而魯西亜国王之
妹を妻に致し、其縁ニて旗印なども魯西亜之鷲之形を時々相用候位、至て
29ウ

親深く御坐候、兵船も相互ニ出し相助候事

一、歐邏巴諸州静謐ニ相成候ハ一同申談、是迄交易無之國々之地を求メ
いづれも手廣ニ仕度所存有之諸州ハ数百艘之軍船差出し、逸々使節

を以て所々交易取組相談候趣ニ御坐候、然ルニ此節國王ハ書簡奉捧之義
ハ全く唐山一件より發氣仕、イキリス國・フランス國申談之上ニ而

御當國へ向ケ商買相願度所存有之趣、和蘭国王承り、日本之儀ハ

古きボンドゲノート仲問又ハ一致
などを云の心得ニ罷在候ニ付両国之内より使節等差

越候儀も御坐候ハ、御大切之事ニ付、其節御取扱振御内密申上候儀ニ御坐候

右御取扱振ノ儀者両国とても國を押領(はか)などの意存候者無之、只商買(買)

手廣ニ仕候存念ニ御坐候得者決て其節荒(ママ)かまし候様之御取扱御坐候者

以之外儀ニ成行可申、尤使節差越候節ハ必船一艘渡來可仕候間、決て

28オ・29オ（下げ札）

ヲーステンレイキ」ハ「トイツ」と同じ国ニて、或ハ「ドイツ」と稱し候ハ「ヲ、ステンレイキ」の属国を唱へ申候

て 畢竟同国之事故、一ツニて相濟候事をケ様別段認候事疑敷事ニ御坐候、又「トロコハ歐邏巴ニ而

□(虫損) 込付合無之、他宗之国之旨何レ之書ニも記し有之、今一致いたし候て、此国までも攻來候、評

議之同盟ニ加り候事も甚た疑敷、又「ナアペルス」ハ「イタリア」之中之

一 小国ニ而右書載セシ外ニ大

□(虫損) 之同盟ニ加り候ものも可有之筈之処、夫を相除き、此小国を加へ候事、是又不審ニ御坐候

30オ

手荒之御取扱被成間敷候、もし腹立仕候而引取候ハ、甚以六ヶ敷相成可

申候事

一、右御取扱振ハ狭き出島之如き場所を相定、能々規定を定メ、先一應商

買御差免し、兩三年も試、彼方より自然ト引退候様利潤薄き仕方ニ

仕組候方可然候事

一、無理ニ追返し候而ハ外ニ一致之國(キ)ニも有之候ゆへ、軍船数艘差越可申哉

難斗候事

一、唐國近海込数艘之軍船差越候事

一、國乱引出し互ニ接戦ニ相成候末、終ニ和を乞候方々戦争中諸雜費償ニ歐邏巴之規定ニ候事

右之通故、厚く御勘弁有之、先一端イキリス・フランス交易御差免し

30ウ

有之候方と奉存候事

○先凡右等之儀ニ可有之与探索仕候御承知も御坐候ハ、早々為御知可被下候、右牀和蘭陀より交易媒酌仕候節ハ和蘭も已ニ敵国同様之儀、毎々申上候通、如何ニも狡猾之致し方、和蘭ハ説客ニ無相違与小弟ハ見据申候、此場ニ至り候てハ決て和蘭之説ニ御泥ミ無之、速ニ御決斷、今般之使節ハ何となく御差返し、跡之処ハ諳厄利亞なり佛朗なり使節船渡來可仕者必定ニ候間、速ニ追返し、手向可仕候ハ、打碎、追々軍船差向候ハ、接戦防禦之手配仕居、勝負相決可申聊も恐る、ニたらず、愉快之至ニ御坐候、若和蘭陀之説ニ泥ミ微弱之御取扱被仰出候ハ、

皇国千古之御規則相崩候而已ならず、更々彼方へ威を付るニ当て

31オ

迎も取返しハ相成間敷、何れニも最早安穩平和之御取扱可然御時節ニ無之、必らず接戦与御治定有之候方、外ニ可申上策無之、假令争戦ニ相成候と

て唐山のことく醜態を顕し候儀ハ決て無之、外者いさ知らず、九州ニおゐてハ士氣格別ニ相振、肥・筑阿家ハ申ニ不及、諸家共皆打九鼎之勢に

右三枚之半帖ハ肥前之伊東玄朴・権貴某氏之邸へ深更裡

門より参り、血判同様之誓約いたし、借受候書ニテ原本ハ数

葉有之候処、肝要之処斗綴糸切裂(筆カ)き借用いたし来候間、書中之

主意熟考仕候処、長崎鎮臺などより此方之政家へ相贈候御達之

書簡と相見申候、和蘭王書簡大意之処ハ去ル八月書簡へ夫々

之役人相添出立いたし候跡ニ而、長崎奉行より在館甲必丹へ

以通詞大意被相尋候書付を相見(拜カ)、文も長崎風之口氣多く相見へ申候

31ウ

玄朴義ハ此書直様写し取、封之儘、鍋島侯へ呈上ニ相成候様、夫々へ

書状相添十日切ニ指上申候由、直話ニ御坐候、右之通甚た厳密之

書付ニ御坐候間、纔三枚之零帖二者御座候得共、若哉御心得ニも

可相成哉ト奉存候間、奉入御覽候、私考仕候処、何レ此度之義者最

早此儘ニ御相穩便ニ治り候事者、多分有之間敷、且和蘭陀王書簡

之中、十二国之名も疑敷義ニ有之事、愚按荒増し下ケ札仕候

通ニ御坐候、左候得者畢竟和蘭陀ハ味方之貞ニ而矢張此邦を

恐嚇致し交易相始させ、自己も此上沢山之利潤承度存念与益

被存候、当月使節之船出帆仕候ハ、佛蘭西・英吉利之内ニ而
又々使節船一艘参り可申、左候ハ、定て世上一統人氣騷ケ敷相成
可申、廟堂御評儀者如何御一決ニ相成可申哉、不奉存候へ共

32才

本文ニも御坐候通

皇国者千古以來外国より騷擾を受候て、一度も屈膝候事無之

事ニ御坐候へ者此度ニ限、御穩便と申御評儀も無覚束被存候

たとへ御穩便之御取計有之両三年之処ハ、平和ニ御坐候共

始終無事ニ者多分有之間敷ト奉存候間、御国許者海防

之御役者無御坐候得共、世上騷ケ敷相成候ハ、臨時如何様之御用

被蒙仰候も難斗御坐候間、先ツ多分ハ外國と御絶交ニ相成

可申と被思召、内々御用意被成置、危急ニ臨ミ、諸家より

も早々御覚悟出来居候ハ、萬事御都合宜敷、假令

御用向如何様被仰蒙候共、御武功可有之奉存候間、右書簡

指上候、序恐ながら愚意申上候、以上

32ウ

辰十月四日

箕作元甫

十月九日

一、大御目付稻生出羽守殿の左之御觸書有之候

堀大和守殿、御渡候御口達書写壹通

当七月中長崎表へ阿蘭陀國使節軍船壹艘渡来

書簡差上候、右大意ハ外國通商相願候儀を申立候迄二而

外別条なき事二候、世上二おゐてハ彼是雜説も可有之哉二候

間、心得罷在候向々江無急度可被咄置候事

風説書

十月六日軍船出帆仕候覚悟二有之候、併若夫迄二右書簡

御答到来不仕候ハ、無餘義十月廿一日迄ハ滞留仕候心得二御座候

右日より遅く相成候得者肉類之食物尽、加之和蘭本國へ帰着

仕候ための風順取失ひ候間、是等之処、御憐察被成下度奉希候

扱、当表へ軍船ハレンバンク号船態与和蘭国王今日本へ差出候者、日本

33才

御大切肝要之御注進申上候為二御座候、是者全く近年唐国大

変之處より發り候事哉二奉存候、右等之訳合二御坐候間、右御大

切之書簡御答書、何卒十月廿一日迄二被下置候様、軍令司將

官并私迄被仰下度、偏二奉願候、万一江府より御無答二而帰帆

仕候ハ、国王如何二思ひ、悦二候訳二二者有之間敷哉二奉存候、此段謹而

奉申上候

かひたん

びいとるあるつるとひつき

阿蘭陀国王の書簡和解方并御返翰、其外御内密御達書写者

通詞衆一兩人に御定、右和解認方致し候人も御定め誓を立

日本人ハ勿論、和蘭陀人も右書簡并御返翰聊一件聊他

言無之、極秘ニ相成候様仕度、右願之通被為成下、否御模様

御沙汰被成下度奉願候、

かひたん

ひいとるあるへるとひつき

右之趣、かひたん横文字書附を以、申上候付、和解差上申候

33ウ

通詞目付

辰八月

掛 四人

(取付之)
読 附

乙名一人

九月十二日堀大和守殿御下ケ、伊沢美作殿へ相達候書取

阿蘭陀国王書簡并貢獻上物之儀ニ付、委細被申越候趣、令承知候彼

船帰急キ候段、入御聴候処、海上雨季等有之難儀之段、尤之筋二候付
早々帰帆候様、被仰聞候、且書翰者当地江者未相達候得共、御為メノ筋
之儀申上候趣ニも候間、御披見有之候ハ、御満足之義ニも可有之候
貢献物者海外之諸品より御請納無之、御国法ニ候間、其旨申渡
候様可被致、且使節其外之者共ニ為御手当相應之品勘弁致し
遠海渡来太儀之段、御沙汰之趣以て被下候様、可被取斗候、尤右書簡
御披見之上、猶々御沙汰之義遂而在留かひたんへ相達候而可有之旨可
被申渡候事

右之趣、論書相認、横文字相添可相渡候事

34才(注1)

弘化二年乙巳七月四日イキリス船一艘、長崎港へ到着

いたし候付、和蘭通詞罷越、仔細相尋候處、通弁少も相

分り不^(申儀カ)申、船中に唐人壹人乗居候ニ付、唐通詞指遣し、相尋

候處、漢文答書指出し候間、和解指上候内^(申カ)

本国大英之役船にて戦争之用を相勤候、今度国王

へ被差越、諸国地図等計るためニ候、見終候ハ、帰国す

へし、不正之者に無之、我上役折節山前山後遊翫可致

候ニ付、当所御役人願出候者若水并薪・牛等人用候節

34ウ

地民をして商売被^(為カ)及候ハ、勝手宜敷候、我上役言語は

フアラナイ

トウト

中国化刺晒人に通し吐噓^{トウト}之語ニ通せず、我上役今

日書面を上げとも其意を解せず

船主^名 姓^{サミイリナエ} 沙味叻者

船号^{サンフロ} 呕凡(口偏ニ「凡」) 刺^{ツウ}

巳七月

唐方

大小通事

今月廿八日琉球出帆、其後朝鮮へ参、四日入津

乗組人数 式百五十人
内唐人一人

35オ(注2)

化刺晒魯西亜と申事ニ候哉、

吐噓治、此地名相分不申候

漢の語カ(宋)

異国船乗船ハ唐人以^漢翰文書翰差出候處、エケレス船

之由、日本地理そく量之為罷越、尤本国者両三年已

前出帆、当六月廿八日琉球出帆、夫今朝鮮へ参り、夫今

當湊へ着船いたし

右之通、荒増

諸家聞役へ御達書

35ウ

(異カ)

今四日賣国船一艘渡来ニ付、相糺候處、イキリス国役船

ニ而諸国乗廻り候由、薪水乏敷、右品乞請申度候ニ付

且類船無之段申立、疑敷儀ニ相聞不申候、江戸へ之注進

ハ明日申上候、此段国本へ御申越可有之候

已七月四日唐通詞分差出入和解按に此ハ長崎奉行より
上へ御届に指上候文なる

へし、夫故申方至而穩便無雜作ニ

綴り直し有之と相見へし候(申候カ)

今日入津之白帆船へ乗組居候廣東人申候、左之通御坐候

一、本船之儀者イキリス国仕出之由

36才

一、乗組貳百五拾人

一、當六月比琉球國罷越、夫分朝鮮へ罷越候由

一、本船仕出候儀者諸国測量之為、国王分差遣候儀

ニ付、御当地も測量之為、山手へ上陸仕度申出候

一、牛・薪水・油・鶏等申受度由、申出候

右之通、荒増承り候次第申上候、猶委細之義者追々相

尋可申上候

七月四日

和解

世人通詞
穎川四郎八

36ウ

游龍彦十郎

37オ

□^(兼)川箕作元甫今出ス

朝川善庵記

七月四日暎船長崎へ渡来、即日大村侯ヨリ早打注進、十九日江府へ着、九日薪水ヲ乞得テ出帆、即日又早打出立、廿三日夜、江府へ着、廿五日夜、黒田家ノ早打着、暎船風便不_レ宜トテ再崎陽へ返ルト云

此船は大英國の船、係戦船、國皇

着来陸、看地方或地里、看完地方、

可回去、他誠寔好人、我們船官員、或

時到山前山後、来遊玩、稟告你、或

時官要水及柴牛、吩咐子民、賣

買於我們、亦好、我官說話、曉得

中國人、曉得化刺晒之人、不曉得

37ウ

忠恐悉寬　吐撻治之人、我官今日見字、不忠

意、船主名　呼沙
味叻啫船名呼

口編 (11111)
三二　叱刺

38才

弘化二巳年六月十九日御用番阿部伊勢守様へ差出ス

私領琉球國那覇川口去月十五日異國船一艘渡來、卸錠(秘)

候二付、役々差越、相尋候処、言語・文字不相通、唐人一人乗組居

暎咭喇國之船二而二百人乗組、当四月唐東ヨリ呂宗へ差越シ

八重山嶋へ渡り琉球へ致來着候段申候、本船石火矢等載セ付

有之候得共、兵船之様子二而者無之候、然処、去年三月佛郎西之

船渡來之儀共相尋候間、佛郎西人一人、唐人一人殘置、本船致出

帆候段、及返答候処、当七月比暎國之船今一艘可致來着、其節野

菜等所望候ハ、相達呉候様申二付、何様之訊ニ而來り候哉与相尋候得者

諸方渡海中途汐懸りニ而何も子細者無之旨申出候、且又食料

等任望相与候処、是今日本へ渡海地方見分致候段申二付、日本者

38ウ

何方へ乗渡り候哉相尋候処、此儀ハ不取極由申置、同十七日亥子ノ

方へ致出帆候、八重山嶋へ致來着候儀ハ遠海故、何分未申來候、尤滯

船取締嚴重申付置候旨、琉球より飛船を以、申越シ日本へ可乗渡

段申出候ニ付而者領内浦々尚又取締向申付置候、委細ハ長崎奉行へ申達候、此段及御届候、以上

六月九日

松平大隅守

39才

同七月十九日御用番青山下野守様へ差出

一、今四日異國船渡来ニ付、相糺候處、イギリス國之役船ニ而諸国乗廻り候内薪水乏敷、右品乞請度、且類船無之段申立候、外ニ疑敷儀も相聞不申候由長崎へ差置候家来之者へ伊沢美作守・遠山半左衛門申聞候、私義此度阿蘭陀船入津ニ付、為見廻り船行仕、領内針尾嶋・鯛之浦ト申處へ相達シ承知仕候付、此段申上候

七月五日

松浦耆岐守

大小御目付様へ右御届書写、使者を以差出ス

同七月廿日御用番青山下野守様へ差出

一、昨四日異國船壹艘渡来、伊王嶋辺へ碇を卸候ニ付、相糺候處イギリス國之役船ニ而諸国乗廻り候内、薪水乏敷、右品乞請度

39ウ

旨、類舟無之由申立候、疑敷儀も相聞不申候段、伊沢美作守以書付相達候通、承知仕候、此段御届申上候

七月五日

大村丹後守

和蘭陀風説書

渡来之阿蘭陀船より差越候横文字書翰和解

船頭之名 ゲユフレイテン

舟之名 テンユルスボウト

大サ 三百二拾五ラスト 石数 四千百六十石

類船有無 無御座候

咬啗吧出帆 五月廿六日

40才

役掛り者渡来之有無

カビタン
ヘトル

外四人

風説書

一、當年來朝之阿蘭陀船一艘五月二十六日咬啗吧出船仕、海上無

別条、今日御當地着岸仕候、於洋中外國船其外船見掛ケ不申候

一、昨年十月十八日御当地今帰帆仕候、本國仕出し船パレンバンク号^舟十一月

十八日海上無滯咬啗吧表へ着舟仕、当年二月朔日同所今本

國表へ向ケ出船仕候

一、子ードルランドセインデー

和蘭領
印度之地
の都督メルキユス^人

昨年六月十九日

死去仕候

- 一、和蘭國王右印度都督をミニストル^{名官} 相勤候ロキユスセン^名 人 二申付候
- 一、魯西亞國帝の第四女ゴロトフヲルスティン^{名官} アレキサンダラーニコウナ

40ウ

一、義ヘッセン^名 人 之プリンス^{名官} フレデレツキ^名 人 ケマアル^{内室} 之義 昨年和蘭第

八月死去仕候

- 一、フランス國王見舞としてエゲレス國王方江參り申候
- 一、魯西亞國帝見舞としてエゲレス國王并阿蘭陀國王方へ參り申候
- 一、當年二月廿六日フランス軍船ゲレヲパター^名 舟 并フイクトリユリセ^名 舟 咬啣吧表へ着船仕候、右ゲレヲハタラー^名 舟 にフランス國王之使節乗組 罷在候、右船ハ当年和蘭第六月シンガポーレ^名 地 より唐國へ向出船仕候
- 一、昨年十月廿日エゲレス國王ゲオルゲデルテ^名 人 之兄弟コロセストル^名 地 之ヘルトク^名 官 之娘フリンス^名 官 サ ピヤマテイルダー^名 人 ブラシクヘアツト^名 地 二おひて死去仕候
- 一、昨年正月十三日スウェーデン國王カールレルヨハン^名 人 死去仕候、其嗣子コローンプリンス^名 官 オセアル^名 人 位二即申候

41オ

- 一、昨年サクセンピュルグ^名 地 之國王エルンスト^名 人 死去仕候、其嗣子エゲレス之 プリンス官名アルベルト^名 人 之兄弟エルンストテウエーデー^名 人 位二即申候

一、東印度辺、何れも静謐ニ御坐候

一、唐國トエゲレス國との一件、是迄申上候、末々儀ハ別段可申上候

古カビタン

ピイテルアルヘルト

ビツキ

新カビタン

ヨーセフプヘンリイ

レヒソン

42才

弘化三年

閏五月二十六日未刻過、相苧浦賀遠沖江異国船式艘相見候処、翌廿七日

朝、矢を射か如く、同所湊江乗込候付、大和守様御家来、早船ニ而漕付、壹人

異国船へ飛込候処、異国人釵を抜拂ひ候ニ付、飛退、尚亦乗移、壹番乗之

御印異国船へ相建、其内追々通詞之者も罷越、外へ動かざる様申渡、乗込

候趣意承り候処、イキリス国之船にて、交易之願ニ罷越候旨并米・水を乞候由

右船悉く為改不申、荒増見廻り候所、長サ五拾間余、帆六本有之、三階作り

ニ而船之下たハ四階程相廻り見候得共、其下たハ真闇ニて深サ相分り不申、殊之外

大船之由、石火矢三拾六挺、二段ニ備へ、其外兵具等数多有之、嚴重ニ備居

八百人乗組之由、廿歳位（屈強）四拾歳位迄、屈竟之人物已而二而老人等耆人も相見へ不申、其内ニ大将分とも見受候ものも有之、全兵船之躰ニ御坐候由尤昨年三月日本漂流人を助ケ送り来候アメリカ之船ニ乗来候もの一両

人乗組居見受候由、此もの案内にて浦賀湊へ乗込候哉与被存候由ニ御坐候

42ウ

一次之壹艘ハ長サ三十間程ニ而五百人乗組候由、是も同様石火矢兵具等備

有之候由、翌々廿九日尚亦壹艘乗込候由、昨朔日朝注進有之、都合三艘

乗込申候、猶跡（カ）も追々乗込可申哉も難斗候由、尤米ハいまた不被遣候得共

水ハ船ニ而夥敷送り被遣候得共、何方江溜置候哉難相分候由、右ニ付川越様昼

夜共御固メ厳重ニ而御在所并江戸（カ）追々御家来浦賀表へ加勢被遣候

大和守様ニも御用番阿部伊勢守様へ二十九日御呼出しニ而御出陣之御用意

被成候様御達有之、浦賀表（カ）分（カ）之

（かた左右カ）

□□□□ニ而直様御出陣之積、御用意

御支度御整被成、大御混雑之御様子ニ御坐候事

右者昨朔日御（大和守）同所様御留守居、伊藤源五兵衛方へ辻組小頭見舞旁差遣し

承り候次第ニ御坐候事

六月二日

御留守居

43才

弘化三年閏五月二十七日相笏浦賀湊口式里程外、野比濱下

申処江同日辰ノ刻頃、異國船式艘、船かゝり致候付、浦賀御役所

へ追々注進有之、四度目之注進廿八日辰ノ下刻頃到着、即刻

進達相成候写

———殿

異國船之儀ニ付申上候書付

大久保因幡守

先刻申上置候異國船、猶又組之者并通詞差□^(通カ)、船中

バチトン 之様子且國許等為相糺候処、北亞米利加バチトン船ニ而

横文字「北亞墨」 大小式艘之内、小船之方、元船支配船之由、凡元船、長四十二間半

利加北カロリナ」の 幅式拾間式分、深サ六間八分、大筒八十三挺、左右三段ニ仕掛

一地名紫川 此余小筒八百挺、短筒八百挺所持罷在、船主ビツゲレト申、人

数

43ウ

八百人乗組、小船之方、長式十式間、幅五間九分五リン、深サ

四間四リン、大筒廿九挺、左右一カハニ備有之、式百人乗込罷

在、去己四月頃、国許出帆之由、尤子細相尋候処、全商賣筋

之儀ニ付、願之趣有之渡来候由、外逆心等者無御坐候様

見受候付、前文之者共罷帰申聞候得共、右様多人数

乗組罷在、殊ニ大筒数多積込、外武器類者無之趣ニ候

得共、右鉄炮取揚可申処、如何ニも嚴重之備方ニ付、容易ニ差

出申間敷、強而申渡候者争論ニ及候儀難斗候間、浦賀湊合

二里程隔、野比濱沖江船為懸留、番船嚴重付置申候、薪

水之儀者任願相應ニ相与へ、外願之趣書面差出候得共

亜米利加語急ニ和解難取調旨通詞申聞候間、猶此上相

糺之上、取斗方相伺可申候得共、願之趣意并船形等相糺候段

44才

不取敢申上候、以上

閏五月廿七日

大久保因幡守

(44ウは墨付きなし)

45才

弘化三年

閏五月廿七日亜美利賀合同國アメリカ字アメリカ願書ニ此字面を用ゆヨリ捧ケ候國より軍船浦賀

表野比濱一里程沖へ來着、交易願書指出し清国ニ而者既ニ交易願

之通、御免有之候故、最早國朝へ右願指出し候、外他用無御坐候、何卒

清国同様交易御免御座候様致度旨、然処六月五日比幕府より

御達し二者吾國ハ古来より通商致来候國之外、交易御免無之、早々
出帆いたすへし、幾度来り願共同し事なりと被仰渡、右之旨亜美

利賀船將へ御達し有之、然処船將「ヤーメスピトレ」歳七十餘にて至て

剛悍崛強之人物にて平生目中無人と申様之氣象にて此邦人(を尤)□蔑

如いたし候故、交易願不相叶旨御達有之候ハ、若しくハ忿怒して兵

争などを始めましきにもあらずとて兼而千四、五百石より二千石以上の

船、江戸湊内へ荷物積入参り候を十七艘御雇切ニ相成、川越・忍両

侯の人衆を乗せ、幕打廻し御家々々の船印・纏(虫損)□□立ならへ士(虫損)□

皆小具足ニ而身を固む、扱右之船にて順々に番船(虫損)□□手を固め、其第

一番之所へハ浦賀奉行より之使、野装束にて、右御達し書持参、異船

へ乗移り、以通詞文意承知為致、承知之上ハ御請書相認、右十七艘之頭仕

居候奉行之船へ大將分之者、自分持参可致旨申置候、浦賀奉行より

の使者罷帰候得共、其節同心某者画圖方にて異船の圖写取の為

メ残居候、頃くありて御請書相認、大將ビトレ自分持参之積にて、小船を

卸して、夫に打乗、処々徘徊いたし、間違候様子にて、川越侯之固メの大

船小笠原某と申人の乗たる船へ漕寄せ、其船へ乗入らんとせしか、奉行

の船よりも間違ニて、川越の固船へ乗候てハ武備の容子も被窺見

都合不冝とて、急ニ小船にて引戻させんと急き候て漕出セし内、大将
 「ビトレ」ハ無理に川越之船へ乗入らんとせしを、船中之人制しけれども耳
 にも聞入さる容子なれハ乗合候侍立出阿り止め或ハ刀を半分抜懸ケ

46才

已ニ切らんとせし内、一人立向ひ「ビトレ」ヲ強く突き飛ハしけれハ「ビトレ」自
 分之小船の中へ突落され仰むけに倒れたり、「ビトレ」ハ怒氣冲衝し、直に
 小船を漕戻す、異船ニ而ハ兼て日本の容子密かに武器を蔵し、不意に
 迫りて戦を始めんも難斗、且大将の始末いか、と船中より望遠鏡にて

眺め居しが、大将の突倒されたりを見るや否や、急に大砲打手を第三層

の砲の方へ遣し備へ、合圖次第、数十門を打立んと構居たり、「ビトレ」ハ己か

元船へ帰り、第二層の砲四門二丸（丸並）を込メさせ、己を突落たる船を焼打ニ

せんと、ひしめく内、浦賀奉行の使者二、三人参り、其方間違ニて他船へ（虫損）□□

候ゆへ、かゝる不慮の事出来たれと、何分大将たる尊貴の人をかくあらしく

取扱ひ候事ハ幾重ニも赦免あれかしと丁寧にわひけれど、「ビトレ」ハ

承引セす、目前に十七艘の船焼打にせんか、己に無礼セし船のミ焼打んか

將た此たひハ本國へ耻を忍ひてかへり行き、新に兵を拵て日本を打

46ウ

たんか、望次第なりなど、の、しりたり、且日本ニてハ異船ハ浦賀より中へハ

入る事ならずと申せとも、我若し乗入たらハ何の策にて防禦するや
など口に信せて罵りて和好の事ハ耳にも聞入れさりしかハ浦賀の使
も口惜しく思ひ、思ひ切たる氣しきにて立ち帰らんとせしに、異船通詞
南京人、使者を抱き留め、大将をも色々なためたりしか、大将虫損
異國の貴人に無礼せしハ、日本にてハ、其人を罪するや、罪せざるやト問ふ
使者首を切る真似して見せしかハ、大将少し心解けたるけしきなりに
又色々申なため、且大将ハ器物を好候ま、本邦の漆器数件贈り賜ハらハ
いよゝ怒氣霽なんなど申せしかハ使者も憤怒の腸をこらへ、右之事かへりて
奉行に訴へ則被下もの、外に式朱金^⑤て包、漆器数品を賜りけれハ、大将も
心はしめて解けて初の請書を捧げ、七日之日浦賀を出帆したりける、浦
賀の使者ハ浦賀奉行与力筆頭中嶋誠二とて都て浦賀奉行の

47オ

事を管轄し専ら政務に參知する人にて、勇略もすぐれたる人物
なり、右のものハ諷有之、私方へ至て懇意にて此頃弟子黒江綱介「テ子マル
カ」船鎌倉へ參り候節、同人方へ指遣し候時、同人直話しいたし候旨
綱介帰り候て申聞候間、此段申上候

六月二十九日渡來之異國船より差出候横文字和解

テ子マルカ國^⑥ノ内 王ノ「カタテヤ」と申軍船にて、地理を精密ニ相学候

為メ、地球を周り申候、就テハ江戸湊へも罷越度奉存候、尤兩三日之内

帰帆可仕候

歴數千八百四十六年

ステーンビルレ

右之通、和蘭語ニ而無之候付、大意和解仕奉差上候、以上

午六月廿九日

浦賀詰通詞

堀達之助

48才

北亞米利加州之内、バチトン

□□□□
ポストン

「バチトン」ハ北カロリナノ内ニ在リ
「ポストン」トハ異ナリ「ポストン」ハ
「カロリナノ隣国ナリ

大船長サ四十二間五分
幅九間二分

船号 ユリユムビユス
コリユ

水入澤六間八分、水高サ二十四間二分五分分

中橋長サ三十五間二分

艦橋長サ二十八間八分

表橋長サ二十四間、同出シ橋三間七分五分リ

将官姓エームスビツデレ名

年七十

艇大小九艘

副将タムス ウイノレ

人数八百人

年三十

一、外三人副将病氣之由

大炮八十六挺但シ右三段二備 一、其外士官兵卒役々有之

(水夫方)
外佐夫

内、大ンベリ六十四丁

ロトンハハ仕掛 銃か 鉄玉分量凡八貫目

小筒八百挺 ハユヨ_子ウツト附 有之、鉄玉分量八百位

此度我国と交易いたし度旨願ふといへとも我国ハ新に

外国之通信通商をゆるすこと、堅き国禁にして

ゆるさざることなりゆへに早々帰帆いたすべく、先年

より度々通商を願ふ国々もあれと、ゆるさず、其國

とても同様之事なれハ、此後幾度来り願ふとも

無益之事也、勿論外国之事ハ、長崎表あつかふ

国法にて、此地外国之ことにあつかる所ニあらされハ

願ひ申旨ありと(も)こ、に來りてハ事通セざる

間、再ひこ、に來る事なかれ

御請

御當国ニおゐて外国之通信通商不被為成

御免候趣、今般以御書付被仰渡奉畏候、就而者風順次第

早々出帆可仕、此段御請奉申上候

歴数千八百四十六年

船号

六月廿七日

ユリムヒユビツデン

50才

弘化三年年閏五月廿七日

御届書写

51才

弘化三年年閏五月廿七日八幡村濱役人分申出候者今己ノ刻

過、怪鋪船式艘房州勝山沖合ニ相見候趣ニ而何様

異国船之躰、当沖合見張居候処、南風ニ而追々浦賀三崎迄之

間ニ松輪沖与申邊込乗入、八幡浦分も程近之場所ニ而異船

帆柱之数等迄も能々相見候段、再應注進申出候、今朝八幡浦

之者、植網漁事ニ金谷沖合相働(ウ)き居候処、房州洲先之方

分右異船乗込込来候様子、三崎之方より追々小船多□□

来候、浦賀沖合ニ而乗附、右二艘之船へ乗移候様子、帆・碇等

も此時ニおろし、船繋り候様子、其内ニ竹岡下総守様
御陣屋分も多船

乗出し、各異船へ乗附候躰ニ相見へ候事、壹艘之船(者)去年

来候千石積程之船、今壹艘者夫々餘程の大船ニ相見候由、獵
師共見届申出候旨申出候

51ウ

一、松平下総守様富津御陣屋へ問合、右手当可被差出候、調之
趣、其内浦賀近ク乗入候ニ付、廿七日暮時頃、壹番手人数
領分海岸江出張候旨、早船便を以、翌廿八日午刻過、江戸表江
注進有之、依之御用番江御届差出候、左之通

一、御用番阿部伊勢守様へ入御内覽、直ニ御表へ差出候落手

房州勝山沖江異国船大小式船相見候趣ニ付、松平

下総守富津陣屋江問合候処、異国船渡来ニ相違

無御座、人数等手配仕罷在候段申越候、其内右之船相州

浦賀近辺江乗入候趣、差出候見分者より注進申出候

依之兼而申付置候固人数、早速今日領分八幡浦江

出張警固為仕候、此段御届申上候、以上

壬五月廿七日 在所日付 阿部駿河守

52オ

一、同閏五月廿七日夜五半時頃、御用番右御同所へ差出候

私領分安房国平郡勝山浦、其外浦々より

異国船大小式艘相見候趣、今朝四時頃追々申出候二

付、見分之者差出候処、相違無御坐、相芻三崎辺ニ当リ

委敷儀者相分不申候得とも、凡式千石積位、老艘

千石積位、老艘相見南風ニ而同芻浦賀之方江

走り候趣御坐候、右二付、早速近領江も申通、兼而申

付置候固人数勝山濱手へ差出候段、在所家来共分

申越候、此段御届申上候、以上

閏五月廿七日 酒井安藝守

一、大目付様江御案内直御手紙

一、同閏五月廿八日御用番、右御同所へ差出候

52ウ

相州浦賀観音崎辺江異国船相見候処、松平下総守富

津陣屋江も人数差出候趣二付、私領分上総国春木

浦江も早速一番手人数差出申候、当陣屋内江人数

兵具等相揃置、此上様子次第、直様操^{マツ}出し候手筈罷在

候段、在所家来共分申越候間、此段御届申上候、以上

壬五月廿八日 保科弾正忠

一、大小御目付様へ直手紙

一、同壬五月廿八日、右御同所^{御用番}へ差出候

稲葉兵部少輔領分、安房国安房郡館山浦海辺

村々々沖合ニ而異国船追々式艘相見候趣、昨廿七日

己刻在所館山陣屋へ申出候付、早速見分之者差出候処

同国同郡洲之崎村沖ニ帆影相見、南風ニ而相芻浦

53才

賀之方へ走入候様子ニ御坐候間、即刻浦賀御番

所へ相届、近領ニも申達、領分濱方へ固人数差出候段

在所詰役人共今申越、兵部少輔二条在番中二付、此段御届

申上候、以上

稲葉兵部少輔家来

壬五月廿八日

高梨郎右衛門

同壬五月廿九日御用番、右御同所へ差出候

一昨廿七日相芻浦賀観音崎辺へ異国船相見候付

松平下総守・保科能登守^{彈正忠}固人数差出候段、在所へ差置候

家来共及承固人数相揃次第差出候旨、今晚申越候

間、此段御届申上候、以上

壬五月廿九日

水野壹歧守

同壬五月廿八日御用番、右御同所御退出へ差出候

53ウ

去廿四日晝、遠芻中泉御代官所駒場村地先、同国

元領分松島村地先之間、式里程沖江異国船壹艘相

見候旨、中平松村へ注進申出候、然処、濱松城御引渡者

相濟候得共、未郷村御引渡以前之儀御坐候間、有合之

家来を以、不取敢大中瀬村・松嶋村・米津村・小沢渡村

江固人数差出候、尤山形城請取方、其外家来共追々

山形表へ差立候義ニ御坐候得者跡人数少之儀ニ御坐候付、模

様次第加勢之儀、井上河内守家来江申談候旨、彼地へ残

置候家来へ申越候、此段御届申上候、以上

閏五月廿八日 水野金五郎

一、御□大小御目付様へ御直御手紙

右同日右同断

54才

遠芻横須賀沖合へ去ル廿四日朝、異国船相見候由ニ而

西尾隠岐守人数并太田撰津守人数差出候様子ニ候由

拙者領分同国城東郡中方村へ同国榛原郡堀之内

陣屋へ注進申出候付、兼而手当人数即刻海岸

防禦之場所へ操出^(マ)し、尚追々可申越候段、右陣屋詰

家来之者分申越候、此段御届申達候、以上

壬五月廿八日 青山下野守

右同断

遠糸横須賀沖合へ去ル廿四日朝異国船相見候由二而

西尾隠岐守・太田撰津守人数并青山下野守殿分も人数

被差出候様子二候由、私領分同国榛原郡下谷村役場

へ注進申出候間、同所詰合之人数即刻海岸防禦之

54ウ

場所へ操出^(マ)、猶兼而御届申上置候通、在所表へ早々人数

差出候様申遣候由、猶追々可申越段、同所役場詰家来

之者分申越候、此段御届申上候、以上

壬五月廿八日 増山河内守

56才

弘化三年

閏五月廿日御用番阿部伊勢守殿江差出候写し

領内琉球国江映咭喇国船壹艘并佛朗西国船壹艘致

渡来候付、非常手当之人数一組琉球江差渡候様国許江申付

越候趣者以別紙及御届候得共、右佛朗西船乗頭之者、大総兵船

跡合式艘可致渡来旨申立候趣も有之候二付而者何分不容易次第

二御坐候、依之前文一手之人数差渡候様申付置候得共、猶又私為

名代詰合家老之者江手配所之趣、委細申合、早速国許江

差下、追々琉球表注進次第、手当向等無手拔嚴重可

取斗旨、厚申付候、此段御聞置可被下候、以上

松平大隅守

右別紙

私領琉球国之内、那覇沖江当四月五日異国船壹艘渡来

56才押紙

異国船琉球へ渡来候付、薩劔侯分^(典)之御届書

箕作阮甫^(典)筋二而漸手二入候事

大隅守殿御家老外国掛嶋津岩見与申者、壬五月廿四日頃

江戸表出立道中廿日切二薩劔へ着候積、殊二^(典)候得者

琉球へも罷越候由

大隅守殿御先手修理太夫殿、右一件二付、御願之通、壬五月廿八日

御暇被仰出、六月六日頃御出立之由

56ウ

卸碇候二付、役々差越相尋候処、異国人共言語・文字不相通、唐人

乗組居嘆咭喇国之船ニ而乘頭醫師忝人・右妻忝人・男子忝人

女子忝人・唐人忝人外二十四人、都合忝十人乗組、廣東分渡来之由、左

候而宿借請度、滞留候段申出候付、不相成国法之趣相違候処、本国皇帝

之命を受差越候間、地方買取致住居度段願出、是又不相成候旨、相

答候得共、更不聽入、右醫師夫婦・子供兩人・唐人忝人都合五人、上陸荷物

等卸置、本船ハ同八日未刻、西ノ方へ致出帆候故、無是非近辺寺中

明除、召連柵を結ひ番所数軒相構、三司官初役々相詰、昼夜勤

番堅取締申付置、任望食料等相興へ、右醫師病人有之候者致療

治度旨申出候付、醫術ハ中国より傳授致弃用來候由、申断置候

然処、去々年三月より彼地滞留之佛朗西人嘆咭喇人江致面

會度旨申出、強而差留候得共、不致承引候二付、役々附添互ニ往来

57才

為面會候、同国之内、讀谷山間切沖江異国船壹艘相見へ同国那覇

川口沖へ乗来候折、滞留之仏朗西人・唐人右船へ可差越小船

貸呉候様申出差留候得共、不致承引候付、小船相渡候処、直ニ乗越

小船ハ即差返し、其夜者右船ニ滞留、翌七日那覇湊へ碇を卸

候付、役々差越相尋候処、言語・文字不相通候得共、滞留之唐人分佛朗西船之由申出候、二百人乗組、廣東粵門分帆渡来、且大総兵船式艘追々可來着候間、其節迄ハ可致滞船候段も申出候、滞留之兩人ハ右船卸碇候節、帰来候付、如元警固申付置候、尤本船石火矢等載付有之候得共、兵船之様子二者不相見候、是以昼夜勤番右同様嚴重警固申付置候、然処右船中へ嘆国之者も相招候付、強而差留候得共、不致承引醫師夫婦并男子耆人端船二而差越候付、役々附添為致面會候、将又仏朗西人共濱辺へ上陸測量之様子見請候付、差

57ウ

留候得共、不致承引候、大総兵船來着、何様難洪申懸候而も及理

解無異儀為致帰帆、嘆咭喇人之儀も被仰渡置候通り取斗度

候得共、端嶋之儀、其通難取扱、是又本船來着之上、為致帰

帆候様可取斗旨、琉球分飛船を以、申越候、然者平日分差渡

置候家來共并兼而非常之手当申付置候一組之人數去々年

七月差渡置候得共、若異儀之時宜も候者即刻人數差渡候

致手当候段、長崎奉行へ委曲申達候由、国元家來共申越候

然共前文之通不容易訳柄二付而者右一組之人數者則琉球江

差渡候様国元家來共江申付置候間、此段御届申達候、以上

壬五月廿日

松平大隅守

57ウ・58才上部

禁裡より所司代江御沙汰之写

弘化三丙午年八月廿八日武傳兩卿所司代役亭江御行向、如左御沙汰

近年異国船時々相見候趣、風説内々被 聞召候、雖然文道能脩武事全整候御時

節、殊ニ海邊防禦堅固之旨、被 聞食候間、御安慮候得共、近頃其風聞屢彼是

被為掛 叡慮候、猶此上武門之面々洋蛮之不侮小寇不畏、大賊宜

籌策有之、神州之瑕瑾無之樣精々御指揮候而弥可被安

宸襟候、此段宜可有御沙汰候事

(注1) 34才から34ウまでにある頭注の朱文は左の通り。

儒

按に両三年前外國船取

扱方相改、薪水乏敷相

求候て、寔ニ難義いたし候訳

ニ候ハ、随分薪水等被下可

然、但し日本近海測量之

義ハ指留候旨、和蘭人へ御

達し有之候、右御規定相

改候故、若薪水を乞を名

として御制禁の測量

圖をいたし候由にて参り、此

方より否み候ハ、夫を

争□端にいたし申へき

との□□工と相見へ候

(注2) 35才にある注の朱文は左の通り。

儒按に魯西啞にハあらず、仏蘭西

の事なるへし